平泉史学における人間存在―歴史を貫く冥々の力―

皇學館大学大学院　文学研究科　博士前期課程　谷口　太一

問題の所在

かつて東京帝国大学教授であり、戦後は本学学事顧問でもあった平泉澄博士（以下、平泉氏）に関しては、その知名度に反して、植村和秀氏の指摘[一]の通り、近年に入って客観的な研究がようやく緒についたといってよい。

昭和四〇年に平泉門下の平田俊春氏が「皇国史観と津田学説」を『神道宗教』誌上に、また、同じく門下の田中卓氏が昭和四十四年に「皇国史観について」を『皇学論集』に発表して以降、研究は確実に進展を見せる一方で、いまだその誤解は根強いものがある。[二]

冒頭で述べた如くに、平成を迎えるまでは、「平泉門下による師の汚名返上、名誉挽回」という側面が主であった研究が、転換点を迎えるのは平成十五年のことである。当時京都産業大学教授であった植村氏『丸山眞男と平泉澄』（平成十五年、柏書房）は、「両者の思考の様式が同一であるにも拘わらず、その在り方を異にしたか、そしてなぜその影響力を保持しえなかったか」という比較研究を行った一書であり、その二年後にはミネルヴァ書房、ミネルヴァ評伝選より若井敏明氏が『平泉澄―み国のために我つくさなむ』を刊行し、さらにその三年後には昆野伸幸氏『近代日本の国体論――〈皇国史観〉再考』（平成二十年、ぺりかん社。令和元年増補改訂版）の刊行によって、植村氏の言を借りれば「神学的思惟と世俗的思惟」の対立　の如くに―人間的理性の外で―に批判されてきた「平泉澄」並びに「平泉史学」[三]、はようやく「平泉澄」の研究は開始せられたといってよい。

以上、平泉氏に関わる研究史を概観した[四]ところで、本発表では基礎的研究として、平泉史学における「人間」の概念を明らかにすることによって、平泉史学の根幹であると思われる「歴史を貫く冥々の力」について考察を加える。

一　植村和秀『丸山眞男と平泉澄』「第二章　歴史神学者平泉澄」参照。

二　『龍谷日本史研究』平成三十一年、第四二号に発表された、湯川椋太氏の「「皇国史観」と「祖国のために死ぬこと」」は、既に昆野氏によって提言された「皇国史観」の語義確定を行わず、従来の「皇国史観」の語義のまま議論を構築している。

三　所謂「皇国史観」という語句に関しても、田中卓氏は「賛美」と「護持」という分類が可能であり、平泉氏は後者に立つものである、としている。

四　管見の限りでは、平成二十七年に『藝林』第六十四巻第一号において特集号が編集されているほか、平成十五年に、立命館大学日本思想史研究会が「戦後平泉澄は如何に語られたか　平泉澄「批判」を考える一試論」と題して、（「日本思想史研究会会報」二〇号記念共同研究　近代史学史の再検討）「平泉澄」に対する再検討を行っている。

1．平泉史学の形成過程

平泉氏が学び、大学院修了後は勤務先でもあった東京帝国大学では、明治二十年に実証主義史学の祖と呼ばれる、レオポルト・フォン・ランケの弟子、ルートヴィヒ・リースが招聘された。彼は実証史学を指導し、彼によって所謂「官学アカデミズム」が形成されたが、彼とその歴史学には史料考証を重んじすぎるという特徴があった。[五]

大正期に入ると、マルクス（唯物）史観が重んじる歴史法則性を強く否定視するエマニュエル・カントや、先述のランケなどの歴史哲学が紹介された。[六]

こうした歴史学の発展の一方で、歴史学と国家主義との衝突も発生していた。たとえば、久米邦武筆禍事件、南北朝正閏論争、天皇機関説事件などである。

このような時代的文脈の内で、平泉氏の歴史学、所謂平泉史学が、どのようなものであったかを述べるために、まずは、平泉氏の用いる「歴史」概念の分析から始めたい。

本邦における「歴史」著述の試みは、「六国史」が絶えて以降も脈々と受け継がれ、その過程で口承文学の筆記や、漢文訓読の技法、万葉仮名、日記文学など、「歴史」を記すため、並びに読むための試行は、その時代の人々によって繰り返し重ねられてきた。

上代においては皇室、ないし在地豪族の「もの」として（例えば、日本書紀の「一書」、各地の『風土記』など）、平安期には日記文学として成立を見た。（事実『吾妻鏡』は公卿日記の集成である）時代は進み、中世には二大史論として『愚管抄』『神皇正統記』が記されるに至るが、これらが慈遍・北畠親房という「人格」の表出として語られた事は言うまでもない。徳川幕府の成立以降、頼山陽『日本外史』や浅見絅斎『靖献遺言』などが執筆されたが、これらもまた頼山陽・浅見絅斎という人格の表出であった。近世以前には、日本には客観主義によって記された歴史は、存在しなかったと言えよう。

しかし、近代、王政復古の大号令が発布されて以降、西洋の歴史学の手法が輸入されるに従って、人格の概念が歴史から遊離するようになる。先述した「実証主義」である。

平泉の述べるところでは、実証主義の極致とは、「歴史をあるがままに」書き記すことと

五　『大久保利謙歴史著作集七　日本近代史学の成立』（昭和六十三年、吉川弘文館）参照。

六　平泉氏の出身校である旧制四高には、『純粋理性批判』の独語版が収蔵されていたことは西田幾多郎の追想で確認できる。（『四校八十年』昭和四十二年、第四高等学校同窓会）

また、当時最新の哲学であった新カント学派は、ドイツ本国においても本邦においても「一九〇〇年を挟むそれぞれ十年あまり」の期間に終わり（宮野真生子『出逢いのあわい』令和元年、堀之内出版）カント哲学、また新カント学派の紹介は一過性のものにすぎなかった。後年廣松渉が「日本でも新カント学派はもう全然流行らない」と述べていることから（『理想』平成二年）もこのことは窺われる。しかし、上智大学哲学科教授の大橋容一郎氏が『理想』誌上に論考を発表し続けているなど、研究は継続せられている。

同義であり、平泉氏に従えば、このような「歴史学」は「歴史学」と呼ぶことは出来ず[七]、また、不可能[八]であるという。

すなわち、「国史学の骨髄」において、平泉が

> 歴史のあるは単なる時間的経過の為ではない。単なる時間的経過を意味するものとすれば、歴史はあらゆる人にあり、のみならずあらゆる動物にあり、否宇宙一切のもの悉くにあるべきである。

と述べているように、平泉史学は歴史を単に「時間の経過すること」として捉えることを否定する。歴史とは、「高き精神作用」の所産であるとし、それは歴史を認識する主体、即ち人格によって初めて存在するとした。ここで、「変化発展を必要とする」と述べるものの、終生ケーニヒスベルグを動かずその生涯を閉じたカントの生活を例に挙げて、空間の移動は問題ではなく、思想（とその両輪をなす行動）の発展が歴史を成立させると述べている。

また、「酔生夢死の徒輩は、遂に歴史と無縁の衆生である」と述べるように、ただ存在するためだけに存在し、無為に時間を過ごし、「歴史」を主体として認識する事がない（＝「存在する」ということ以外に存在する目的を持たない）人格にとっては、遂に「歴史」は存在しない（＝歴史を認識することのない「蛮人」と変わるところがない）のである。[九]

以上の引用から確認できるように、平泉史学における「歴史」とは、（言うまでも無いことだが）選抜された「人間」の知覚行為であり、エリーティズムの所産である。

「我が歴史観」において述べられた「前には歴史のオブゼクトに人格を要求した。今は歴史のサブゼクトに人格を要求する」とは、歴史の対象としての人格から、歴史を主体的に認識する主体としての人格への転換である。つまり、歴史を主体として認識し、その人格を自らの内に復活させる（ここにおいては、「死」という主体的存在の喪失さえも人格の表現としての一つの行為となる）ことが、平泉史学における人間存在の理想である。

さて、従来、平泉史学の形成は、苅部直氏によれば、大正教養主義の影響下にある[一〇]とされ、昆野氏によれば、「神代」に依拠しないものであるから「帝国主義的な異民族支配」の

七　『我が歴史観』（昭和五十八年、皇學館大學出版部。初版は大正十五年、至文堂）三七九頁、『國史學の骨髄』（平成元年、錦正社。初版は昭和二年、至文堂）十三頁参照。

八　以下、前註『我が歴史観』、十八頁より引用。「万人の出来事を…ありのまゝに少しも私意を加へず、如実に記述するといふ事は…到底常人の企及すべき所ではない。」

九　そのような歴史観について、田中氏は、所謂「平泉澄伝説」としての「百姓に歴史がありますか」をめぐる言説は、平泉史学における「歴史」という語句の誤解であると述べた。（田中卓『平泉史学と皇国史観』（平成年、青々企画）一三六～一五四頁参照。）

一〇　苅部直『秩序の夢―政治思想論集』所収、「歴史家の夢―平泉澄をめぐって―」参照。

体制に迎合したものである[一二]などとされた。

平成八年、苅部論文の発表以前、さらに植村氏らの著書の刊行以前に、既に荒川久壽男氏によって、新カント学派のリッケルトやウィンデルバントの歴史哲学の受容を指摘されている[一三]が、その際に「ウィンデルバントやリッケルトが歴史学と自然科学の差異を論じ…歴史学はくりかへしのない、唯一回きりの特殊な事実を究明する個性記述の科学」であると述べ、それを受けて平泉氏の「歴史はかくて自由の人格の永久にわたる創造開展の世界である」という一節は成る、とするのであるが、「人格」という語に着目したとき、これは大正～昭和改元までの哲学の受容史を考慮する必要があると思われるが、本発表ではさておく。

2. 殉教の気魄―歴史を貫く冥々の力―

かつて、平泉氏は昭和五年、在外研究を命じられ、同年イタリアはナポリにてベネディット・クローチェと会談し、「歴史と哲学の融合」「マルクス唯物史観の排斥」の二点において深く通じ合う所があったと述べている。[一三]

ところで、従来の研究史においては、「歴史と哲学の融合」という観点から平泉史学をとらえた論考は存外少ないように思われる。[一四]

前節までで、「平泉史学における狭義の人間存在」について確認した。よって本節では、一般に道徳哲学と呼ばれる体系における「あるべき人格の比定」について、平泉史学における「人格」概念の具体的な作用であると考えられる、「歴史を貫く冥々の力」について考察を加えたい。

田中卓が既に指摘していることではあるが、平泉史学が人格主義に立脚することは、「我が歴史観」[一五]の、以下の引用文に端的に表れている。

一二　昆野伸幸『近代日本の国体論―〈皇国史観〉再考』（令和元年、ぺりかん社）所収「平泉澄の「日本人」観」参照。

一三　荒川久壽男遺稿集『読史余滴』四六三～四七九頁所収「平泉澄博士の史学の初期形成」（初出は『藝林』第三十五巻第四号。昭和六十一年）参照。同書四百七十頁より、「人格」の語義について、「新カント学派は祖国を持たぬ「世界人（コスモポリタン）」の人格である」と述べる。また、「歴史はかくて自由の人格の永久にわたる創造開展の世界である」という一節に「ヘーゲルの影をみる」（前掲書、四七一頁）と述べるが、ヘーゲルは、国家が、どこか、ある時点で終焉を迎える（『歴史哲学講義』）ものであるのに対し、平泉史学は皇統（それとイコールで結ばれた国家）の終わりのないことを説くものでなかったか。『國史学の骨髄』一六頁参照。

一三　『平泉博士史論抄』所収の「ナポリの哲人」参照。

一四　平泉史学の「目的」を「革命の阻止」にあったとする植村氏の論考「滞欧研究日記にみる平泉澄博士」は、管見の限りにおいてそのかなり早い段階に属する。

一五　平泉澄『我が歴史観』（昭和五十八年、皇學館大學出版部）八、九頁参照。

もしかくの如く（西村真次の『文化人類学』における「歴史」の定義―谷口註）一切の生物に歴史あるを許すならば、即ち人間を生物の一類として全く平等無差別観に徹底するならば、その時歴史の初めは発生の当初に遡るとなす考方は是認せさせねばならぬ。

之に反して人は他の動物と異なり、人の歴史は他のものに就いて用いらるゝ広義の歴史――たとへば山岳の歴史、地球の歴史などと相違するとするならば、両者を分つ原理は何であるか。それは一言にしていへば人格に外ならぬ。これは早くカントが注意した所であって、彼がヘルデルの考をよろこばず、真の歴史は、人が意思を有するものとして自由に行動できる点に存し、従って理性が発達してきて始めて歴史があるとなしたのは、この種の考方の有力な源泉であつた。

「人が人たるは人格による。人格なきものは…畢竟ほかの動物と選ぶ所がない」と述べる平泉氏が、こと「人格」という語の受容・解釈において、カント『純粋理性批判』乃至新カント学派、特に西南学派（ヴィンデルバントら）の影響を色濃く受けたものであることは、ここに示した引用文から伺えよう。

平泉史学における「歴史」とは人格を主体として構築される―これは、先にも確認したように「完全な客観主義」の成立不当性をも含有する―ものであった。この様に、人格主義的な平泉史学が抱えるのは、先に述べた通り、「あるべき人格」、人間としての自覚、その目的をどこに比定するのかという問題である。

先に確認したように、平泉氏にとって歴史を知るということは、「未開の蛮人と袂を分かつ」為に必要な行為であった。その際に主体となる人格について、平泉氏は「我等の人格は、日本の歴史の中に初めて可能である」と述べる。

つまり、人間存在が主体をとる人格を通じて歴史を認識し、（歴史的に）行為することによって人間と呼び得る以上、平泉史学における「人間存在」は限りなく（自他の意識において）選抜された存在なのである。

換言すれば、平泉史学における人間とは自明の存在ではないのである。[一六]すなわち、歴

一六　昆野氏の「平泉澄の「日本人」観」（前掲同書『近代日本の国体論』所収）一五三、四頁において述べられた、「単一民族としての日本人」「純粋で均質的な「日本人」などは、平泉氏の意識下に初めから存在しなかったのではないか。昆野氏は平泉史学における人間存在の希少化を昭和八年以降のこととするが、「人格」という意識が昭和二年の「国史学の骨髄」に見えることから、この問題提起は再考の必要があると思われる。
また、若井氏は「人格」の語には「歴史家の主体性」の側面において着目しているが、本稿に置いて述べたような「歴史的存在」としての人格には着目していない。また、苅部氏

史を認識する主体である人間は、歴史を認識するために自らに修練を課さねばならない。その際に主体となる人格が、「復活」によって認識されうるという「国史学の骨髄」の一節や、「古人を泉下に起して、之と肝胆相照らすは、古人と同様の高き深き精神にあらずんば不可である」という一節からも、このことは伺える。

具体例を一つ上げれば、平泉史学において、日本とは「未だ曾て革命と滅亡とを知らず」[一七]いた国である。これはすなわち、建国の際に天照大神によって下された、「天壌無窮の神勅」が幾度も「復活」して来た事と同義である。言を返せば、幾度も「復活」するということは、同じように幾度も「忘却」せられた、ということである。

かつて、平泉氏は「日本精神発展の段階」[一八]において、古代・上代・中世・近世・近代それぞれの時代区分の理想を、古代はその理想は如何様にも分化しうるとした上で、「価値は時代とともに変じ、理想は世と共に推移した。」と述べている。この様な変遷を遂げた日本の歴史において不変である（歴史の背後を貫くもの）はただ「天皇（＝日本）に対する忠義」である。忘却と復活は繰り返され、しかし皇室は絶えることがなく来たのが国史なのである、という認識が平泉史学の根幹にあると思われる。

日本国に生まれ出で、その建国の理想を追い求め続けた「人格」も「理想」も、時間の経過とともに忘却せられてしまうことは必定である。しかし、英雄はたとい世の中に忘れ去られようとも、直接の関係も関節の関係もなく、その人格はある時復活[一九]し、その理想を同じくして在り、そしてまた新たな人格を形成し、その復活は歴史において絶えることが無かったことが、「歴史を貫く冥々の力」の内実であるといえよう。

平泉氏はすでに大正十四年に「我が歴史観」において、「歴史はかくて自由の人格が永久にわたる創造回展の世界である」と述べており、その学究生活の最初期からこのような意識があった事を「我が歴史観」は端的に表しているといえる。

平泉氏は、「万物は流転」[二〇]することを否定しはしない。ただし、その流転の中に、「不易なるもの、万世を通じて常住なるもの」を求めることが、「茫然自失」せぬための手段である、と述べる。このとき、人格は、「天壌無窮の神勅」を究極目的として行動する。

以上述べてきたことから、平泉史学における人間存在の在り方は、少なくとも初期の段階に於いては、田中卓氏の言の如く[二一]、厳格な人格主義を有することが確認された。

は大正教養主義的の影響下に「人格」の形成を見ている。苅部氏の議論においては、大正教養主義の根幹たるカントに遡行が可能であると筆者は考えている。

一七　前掲同書『國史學の骨髄』十三頁。この語句は、「革命による歴史の終焉」という言説に対抗するものであると考えられる。

一八　前掲書、『我が歴史観』所収。

一九　この復活が「全くの偶然であること」も、「冥々の力」として存在するのではないか。

二〇　平泉澄『萬物流轉』（昭和十一年、至文堂）「六　我等の依拠」。

二一　田中卓『平泉史学と皇国史観』一五三頁。「平泉史学の特色は、史観として人格主義・

平泉史学における人間存在が常に、近世における人格主義の代表格であり、かつ大正教養主義においてよく参照されもしたカントにおける人間存在のように、常に人間であることを命ぜられ続ける「ぎりぎりの」[二三]存在であるかどうかは、他日を期したく思う。

伝統主義に立脚し…」

二三　坂部恵『カント』（平成一三年、講談社学術文庫）四十四頁参照。